



八宗
起原

釋迦實錄

五

特
波13
1809
5-5



波門
號 1809
卷 5-5

八宗起原釋迦實錄卷之五

東都 鈴亭谷峩譯述

廿九 釋氏一族多く法門不入并提婆佛法と妨ぐ

然て其後淨服王ハ世尊の師弟ハ無上菩提の說法聽門と
望みぬひて。后宮新宮と初。五百の釋種滿朝の群臣内宮の
女官們と咸清隨殿不微ぬ。バ大家悦び敬んで。淨法聽門
みぞ参りける。當下世尊ハ般若の切徳を説かんと審みて
赴く處ハ一切衆生の邪と穢れ惡と退け自然の善道不
至しぬ。因果應報の理と最明白示しぬ。バ君臣隨喜の
涙と流して。實有ぐつた淨法哉と。大家感伏あつた中も
別く白服王の貴子慶喜阿難斛飯王の貴子施禪阿那律甘

天

同

佛

露阪王の貴子在羅 ありびふ。婆羅門の烏陀夷 離婆也
 俱不速く獲心善道不赴き、老病死苦を厭ひしより、利
 發深衣不潔を棄て、法弟と成ぬひし。遠人々ハ次男ふて
 世嗣不事と闕さるる。其父母ハ却ふ。九族天つてむてふ。出家
 切徳と悦びり。後年純裨貴子の兄可南貴子在羅貴子の
 兄少皮貴子も。各国家と世子不讓して。出家遁世せしむる
 不。獨慶喜の兄提婆のそ。深く世尊不冠し。志ハ却て佛光と
 世不示も。是も亦天の所祈なり。思發まじり。收事ありりし。
 送て世尊ハ夕陽山と。摩訶摩耶山と改めて。清隱殿を刹場
 とし。あひ。初利天正寺と号なり。父母被忍經。摩訶般若經。發
 心被謝經。あんど聞し。妙法と説ぬ。ハ。聽聞ハの成る。法
 して。益法門不敵する者。發し。くぞ數倍し。ける。當時提婆ハ

余不在。流る由と聞より。若嗔怒除倍け。色ハ。深き遺恨の
 悉多と害して。佛法と破滅せんと。大惡念と獲し。去り。阿羅
 の出家と大く憎む。骨肉同胞の兄弟あると。義絶の憶ひ不
 うち過つ。其身ハ妖術をりて。魔神と被使。法性妙件と唱
 做し。地冥山の道士を斥して。邪道を學び。妖術を習
 ひ。神變奇特と修煉し。け。一日數萬の魔軍を願し。て
 雲不勝つ。死降り。摩訶摩耶山あつ。世尊師弟と屠尽し
 て。らまんむと。湖の湧。如く懸波と化り。毒霧を降し。毒
 を獲つ。其業ハ威蓮華と變し。毒霧ハ奔て。最涼し。き
 香風吹下し。魔軍們が。あ。會了數萬の劍戟。皆
 空中ハ吹颯し。忽地魔陣の真向より。雨の如く。不降下。不
 魔軍大い。不勢。周章て。四散ハ落不逃。少ぞ。提婆も。

退たしが亦懲たまふ數回魔殺せんと寢べども邪ハ正ハ勝と
 独りて後ハ亦邪計を更て其身一個の道と變り石を
 玉と瓦と黄金とを神變不思後の邪と行ひ諸國と經
 歴しつ。佛法ハ本邪道なり。親兄弟妻子を捨て。惡も情も
 顧らざる。子孫を絶えと殊勝と心得利髮滌衣の姿と成む。
 主ハ下人小芥を信へ。惣ハ子と礼稱せ。寔ハ愚盲の至あり。
 と移行せ凡俗の匹夫惡婆ハ狂惑せしめて。遠惡言を理
 論とし提婆ガ妖道士を信む者漸々小孫倍しつ。果々
 阿支羅兜國王の子。阿闍世貴子。鉅奢那國王の子。龍種貴
 子も提婆の言と信用して。其父王と廢し。王化小教きん。
 專達意を企てし。是ハ依て提婆達多ハ仕をましつりと
 圖小乘て。國家の仇ある轉迦を造し。七國の源ある佛法と

破滅せん毒舌と嗜しつ。世尊ハ天眼通天耳通も提婆
 が惡行を知覺めせば。是を捕へ懲し。あふ小殺くも在し
 まさねども。彼自然慚愧して。正路小皈するを候あへ。其
 終捨措あひし。渠ガ為小惑ハさきて。五逆罪を贖し去
 者と速く救をむ。眞府ハ臨べし。大慈悲を獲し。あひ
 阿羅漢を皆從つて。初利天正寺を坐あひ。提婆ガ毒を流し
 して。國々と經歷しつ。懲小遂ひて養理を知りぬ。匹夫匹
 婦を教化し。あひ。阿闍世龍樹の兩貴子も。懇切小論し
 ぬ。兩貴子漸愧後悔して。廢せし父王を亦存おし。そ
 して孝養し。あひ。佛法信者と成し。寔ハ交論の甲
 斐ありし。世尊師弟も歡喜し。躬て靈鷲山小假精舍を
 營し。後法教化し。あへ。遠近の老若男女。日毎小泰清

群集せり。然るに當山浴峻して、波来甚便ありぬ。摩訶陀国の頻婆沙羅王衆の信者、皆與ふ。大いに人徒を養ひ、巖を碎き谷を墮めて、麓より頂上まで長たて五里方石。廣さ十餘歩の石階を、石目不壊たる泰清の便に成し、一人、寔に無量の功德之頻婆沙羅王が剛法のおも、石階を築し、西域の紀の後、不獲て、如來世に在るに、九十餘年、不墜き頃あり。然るを早く抄出、其の畧傳、編文の故あり。前、後、遠、格、勘、り、る、を、省、官、混、乱、無、替、の、流、と、編、者、を、難、し、め、ひ、お、せ、と

三十

法華字ふた轂を用了權輿并佛前不花と供事

提婆の飽まで佛法を好ん、と伎倆ども、法徳ふ力速むむ。做む事毎、不仕損ね、却て害らるるの、間猶、降の心ハ、益く、亦靈鷲山の動靜を窺ひ、這回ハ、妙件とも、荷、控らひて、候、不、敷、十、萬、の、魔、軍、を、將、つ、前、後、不、配、分、て、靈、鷲、山、の、麓、を、嚴、し、く、圍、こ、樹、林、叢、不、火、を、放、ち、猛、風、毒、氣、を、吹、颺、て、世、尊、師、を、一、個、も、残、さ、ず、焼、殺、さん、と、笑、け、ども、樹、木、土、石、も、悉、く、甘、露、不、沾、ひ、て、毫、も、燃、た、不、登、ら、ん、と、争、つ、ば、足、ハ、地、不、着、て、一、歩、も、我、ま、さ、ず、魔、軍、們、互、ひ、不、面、見、合、し、て、只、罵、々、と、罵、る、の、威、聲、不、異、あ、ら、ぬ、と、惘、て、退、く、と、欲、さ、る、を、四、波、自、由、と、得、ぬ、る、み、ぞ、不、測、々、々、と、法、州、妙、件、提、婆、も、空、しく、巖、を、眺、望、一、霎、時、慄、然、と、佛、德、勢、の、如、く、あ、る、を、世、尊、法、羅、漢、つ、ば、更、あ、り、泰、清、の、衆、人、們、不、聊、恙、毎、々、と、も、麓、



異形の魔軍們が、拍撃して、間直ぐの登り来るも、
 の遙不見のまば衆人の恐怖で、國法の心も空あると、
 して、世尊の速く魔道の惡徒を、退治をべいと、宣ひ、
 如意のて、虚空を招き、忽然として、諸天善神、紫雲、
 數萬騰りて、お上り、死降りして、摩訶迦葉、是を將て、
 猶、佛尊と示さん、おん、幢幡、翻と、續續して、
 をらち、聲、麗、小、群る、魔軍們を、蒐、散さんと、
 魔の利劍を、閃ろ、大、悲の弓、小、箭、刺ひつ、紫雲の上より、
 威、勢、猛、攻、降、おひりり、是よりして、佛、亦、小、幢、幡、を、
 ね、彌、羅、鏡、鏡、もて、續、經、の、助、聲、と、おら、ま、
 降、依、の、儲、け、ふ、て、今、皇、國、の、諸、寺、院、不、用、
 是、あり、且、親、諸、天、善、神、が、攻、降、り、お、み、と、見、
 敵、群、

と、思ひ、お、け、ん、一、支、も、戰、ひ、挑、ま、
 減、四、落、八、散、不、放、走、
 湖、と、憑、ろ、火、焰、を、降、
 咒、を、ま、ど、も、妖、湖、天、光、と、
 妙、件、提、婆、の、若、と、叫、つ、
 たり、や、と、兩、魔、將、を、
 勝、り、て、昇、天、と、を、
 牽、居、ま、は、怒、親、平、
 惡、因、果、應、報、の、理、と、
 て、も、嫉、心、不、ま、ど、
 せ、と、目、連、速、く、神、
 提、婆、が、五、賊、不、
 魔、軍、們、大、く、苦、痛、つ、
 妙、件、

釋迦牟尼

六

聲をふり矯りて、南無釈迦如来賓〜ゆ〜。方僅俺がふし
 幾ぬひ〜。尊き浄法ハ心魂不傲〜か〜も猶迷ふて、悪
 念消滅せざり〜へ俺あが〜。最後間〜死。實遠身ハ人間
 あ〜む。天地開闢の時世ふ〜して六萬餘歳長命〜。料
 不出つハ自然通を得て、妖術と弄び、惑不邪行を傲。提婆の
 悪不弄權を容て、最も尊た正法を妬んと志〜。懼さ〜。遠服
 變化不佛果と得ぬま〜。生者必滅の理を悟りて、彼岸不
 到すべく。俺没後の皮と剥て、塵本不張あひ。且六〜。とら
 ぬ〜。五ッ四ッ九ッ八ッ七ッ。時を遣ひお札〜。夜もま〜
 箇様傲〜。あ〜。悪魔ハ時を違つて思ひ惑ひ。妬ふ〜。料
 ま〜。と遺言〜。忽地不本形と現〜。け〜。最怖〜。料
 みて。憾悔不罪も亡びけん。其隨苦痛の悴もあ〜。大泣せ〜。

遂ふらる。世尊端羅漢ハ最初より料あると知覚あ〜。とも
 提婆ハさ〜。之穂圃ハ。悉皆〜。衆人も。遠奔奉不預
 きつ。愈佛法の廣徳を尊信〜。て。釋尊を。各一終拜
 あ〜。ける。執中提婆達多ハ。大いハ慚愧後悔〜。つ。悪心を改
 げ〜。法身と傲〜。と。頻不陪活〜。を。奉。穢心を觀
 むひ〜。ハ。世尊ハ善哉と稱〜。ひ。髪を利せ法衣を穿て
 法名彌達と号あひつ。弟子あ〜。せ〜。走ける。諸亦料の妙
 件不引導を授あひ。而ち渠が遺言不終〜。皮を剥製作
 して。是を右靴と号けつ。時々定数を打吟せ〜。より。悪魔の
 障得ハ盡りける。是あ〜。右靴の權喪あ〜。時の瘡ハ是よりあ〜。づ
 余はバた靴ハ惡魔降伏。最一の要具あ〜。ハ。後
 皇國不日蓮上人法華宗と江湖上〜。推弘めぬひ〜。時。其高

徳を精むある。悪魔の障得多うるを。上人則ち教を用
あり。現法儀經の抄り。最も烈しくおぬひ。悪魔を退散
ぬひ。今に至りて。法華宗あり。題目の條ふ合して。右
教を抄く事。その儀ぬ

周ふの。世尊件牛の皮をぬく。右教をぬりぬひ。より。
其形三國不傳。其の儀ぬ。後ふ。軍陣の要具。其の用ぬ。
事。その儀ぬ。其の儀ぬ。其の儀ぬ。其の儀ぬ。其の儀ぬ。
十二天を表す。面直九寸。九曜の星と表す。兩
面の皮。日月を象り。腰紐の皮一寸六分。十六善神と
表す。一方の儀ぬ。數二十八。二十八宿を表す。一方の儀
の數三十六。二十六禽を表す。あり。附て曰。面直を
表す。九曜の星。ハ。羅睺星。土曜星。水曜星。金曜

星。日曜星。火曜星。計都星。木都星。月都星。以上是之
儀の數ふ表す。二十八宿。ハ。東西南北。不現。星。ハ。
連圖左の。角星。亢星。氏星。房星。
心星。尾星。箕星。以上東方。不現。斗
星。牛星。女星。虚星。危星。室星。
壁星。以上南方。不現。奎星。婁星。胃星。
昂星。畢星。觜星。參星。以上西方。不
現。井星。鬼星。柳星。星々。張星。
翼星。軫星。以上北方。不現。四七。二十八宿。是
あり。三十六禽。ハ。十二支。より。出づ。十二支。の一支。毎。三有
て。是を。三十六禽。といふ。古。よりの。神。數。あり。今。之。を
知。者。少。子。ハ。鼠。蝙蝠。燕。あり。世。ハ。水牛。黄牛。兎。牛。

釋迦牟尼の
著るべきの
るり

あり。寅ハ虎。豹。狐。あり。卯ハ兔。狐。貉。あり。辰ハ龍。蚯蚓。
蛤。蟬。あり。巳ハ蛇。蟬。あり。午ハ馬。鹿。獐。あり。未ハ羊。犴。羚。子
り。申ハ猿。猴。抗。あり。酉ハ雞。雉。烏。あり。戌ハ狗。狼。豺。亥ハ
豚。獠。高。猪。あり。以上を地の三十六禽といふ
昔日佛母摩耶夫人前世の切徳廣大故。切利天の福相と受
既小生天の果と得ぬひて。今ハ帝釋天の淨姫宮と傳りま
ぬひと。三明六通を得ぬひし。世尊ハ教不。知覺ぬ。昇天
して二世の母君不。見。奉奉らんと思ひぬ。佛法障得の
惡魔外道。虚を擧。折。おま。遠土を去。在。佛敵
提婆も降伏し。解牛も解脫して。其皮大ひ。切を奏し。一
惡魔の妨げ。盡り。今ハ心安し。思。高。手。行。一
ぬひ。天。龍。變。了。金色の雲。不。騰。つ。切利天の。善。現。殿。不。昇。て

ゆ。ハ。數。多。の。光。行。童子。不。圍。繞。せ。ま。て。帝。釋。天。出。現。ぬ。ひ。
世尊を恭敬礼拝しぬ。當下世尊ハ先妣の生天の果と得る
と。物。始。ぬ。ふ。と。帝。釋。天。髮。頭。ぬ。ひ。姫。宮。不。那。と。告。ぬ。ハ。姫
宮。躬。て。立。お。ぬ。て。二世の淨對面と做しぬ。佛母の姫宮も
淨尊も。淨歡喜。限も。無し。愆。て。世尊ハ帝釋天と。姫宮の淨
為。不。報。慈。經。を。授。ぬ。ハ。姫。宮。お。ん。歡。喜。の。陰。り。不。拈。の。花。を
不。折。ぬ。ひ。て。如。來。不。捧。げ。ぬ。ひ。つ。願。く。ハ。一。佛。淨。土。の。引。接。違。
ぬ。ハ。と。固。く。結。縁。し。て。釋。の。ぬ。ハ。摩。訶。曼。陀。羅。華。足。あり。今
和漢推あ。て。佛。前。不。花。と。供。え。る。ハ。這。時。より。を。始。り。る。
三十一 毘首羯磨始。て。本。佛。と。彫。む。并。淨。版。王。崩。淨。
世尊ハ母君のおんぬ。不。法。去。ぬ。ハ。既。不。し。一。夏。九。旬。不。及。び
け。ま。下。界。ぬ。飯。依。の。衆。人。久。く。一。周。夜。不。燃。を。笑。ひ。し。心。地



帝釋天
ていしやくてん

大迦葉
だいけあつ

佛母
ぶつぼ

釈迦牟尼

十



世尊
せそん

舍利弗
せりふ

阿難
あなん

佛母
ぶつぼ
世尊二世の
母君不
謂いあふ

初利天不

昇て

世尊二世の

母君不

謂いあふ

釈迦牟尼

して小児の父母を慕ふがごとく大いに愛慕して居りし中にも
 阿世羅国の優填王と頻婆沙羅王の取別て最も苦不堪忍の事
 當時彫工の名人小毘首羯磨と喚ばる者ありしはもとて佛の
 禽獸も感動する程の堪能ありしが深く三窟僧 佛法 不 敬 依
 一は色バ日毎小說法聽聞して佛顔を能見惚るるを西王
 相敬ひあひて遠羯磨を徴ひひ如來の像を摸刻せよと今小
 羯磨ハ大いに歡喜小可息生ある福縁有て人如來の尊像を
 彫奉るごとく生前の面目死後の卒懷是れ過とと身と法津つ
 赤梅檀の良木を採て一個一室小閉籠りて精神と聚りて
 日と重ねて五尺二分の立像彫畢けり是れ本像の始也遠る像
 後小 人皇六十六代 一条院の浄宇永延元年三月十二日東大寺
 の衆徒 日本一持来して同浄宇寛弘八年小 浄堂建立せし

まけり今小山城国清涼寺の奉堂安置し奉りて則 釋迦
 堂といふ毎歳三月十九日開帳あり寺僧各帛を以佛像と扱
 ひ奉る浴小是を淨身掛といふ悉緒の諸人大いに群集して
 蹉峨の釋迦と粟一奉るは是あり却説佛像法統一志と西
 王依ひあひて靈鷲山の窟殿安置しつ各礼拝しあふまじ
 も羯磨が精神を用て摹刻し奉りて尊像を色バ如來の
 尊容小毫も違はざる兩王を感涙し淨袖と沾りぬひつ兼て
 羯磨と敬ひひ大いに賞讃しぬひて金銀珠玉を賜りたり
 遠尊像を後小 徳園精舎の窟殿安置して安置し奉
 りぬ諸釋尊ハ切利天の說法畢て帝釋天と母后小別と
 若ぬひ若靈鷲山小降りて波本像歩きて出て世尊を迎ひ
 あぞ世尊是を齋して善哉と賞しぬひ本佛小對ひぬ若温

槃遠たふ有む其不代りて未來の衆生を濟度あるべしと
宣ひつ。俱不殿上へ入らむ。二密敬依の人々ハ大ひ不歡喜
漏躍しつ。亦感涙とぞ拭ひける。茲不津版王ハ新尊ガ諸國と
教化をべしとて。若迦毘羅國を出一より。既多數多の年と
経まども。還りぬらむと等不憐あひ。今ハ老衰しあめて改
事も懶く思せば。聰明睿智凡あらぬ。難陀太子不轉輪王の
位を讓てぬらんとて。受禪の式を行ひぬ。

月氏國王傳統系譜
四神龍道靈弓靈箭
四魔能莫惱白蓮劍
閻明如意密珠
從蓬萊宮所獻王冠
同玉幡縵蓋飛竜鉞
五天竺山海陸野道地圖
佛の密器を授ぬらして。仙洞不後任しぬ。花を種ひぬ。後不

痛齋の濟不例より。大く重らせぬ。今ハ著婆も率了
し。死病を愈ま由も無く。哀を崩濟去あらんと。衆人
愁ひ不沈し。と世尊ハ天眼通りて。知覚ぬ。バ摩訶迦葉と
靈鷲山不在し。阿難。羅睺羅。優婆離密。目連。舍利弗。
以下の阿羅漢。事とわちて相從へ。海雲小騰あひつ。五
百里の行程と。瞬間不亦行して。迦毘羅城ある仙洞の深さ
不入らむ。這時既不津版王ハ。勢未磨ありぬ。ぬらひし。ガ
新尊の師弟昇殿して。王膝を礼拝しぬ。法顏を齋して。
歡喜不堪ぬ。從。佛病苦忽地愈て。心禪定不入か如く。龍
眼を閉ぬ。睡がごとく。崩濟しぬ。難陀王を南奉り。三
宮。三新宮。女官群居前後と。失ひ。返悲し。して。做樹多
余は世尊ハ。大猶哀返悲嘆し。おん自も。塞りぬ。ひし。を

意へ持戒の僧と比丘といひ。女を通稱して尼といひ。扱ふ比丘尼
 とりよの僧の女といひ。一般の女をば五百戒と持と雖も。男女天
 地の差をまば。應ふ比丘の次うべしとぞ。諸も后宮の菩提の
 道へ入らひしと羨ましく。好容芙蓉の両夫人。鹿野女。瞿陀弥女。
 耶輸陀羅女の。三新宮と甫うて。其方ざる小宮仕の女官們
 多く女僧と成て。法門不入ら。烏將軍夫婦も仕を辞して。
 俱ふ佛身と成しより。兩夫人烏將軍夫婦ハ世尊在世の從ふ
 世を去つ。三新宮ハ佛涅槃の後。無念無想不誕生の素懐とぞ
 遂ふける。枕中耶輸陀羅女の。妙惠尼と法号して。庵室と摩
 訶摩耶山の麓。不造り宮あり。三摩耶行不入ら。靜小六塵
 の世を脱まぬ。此ハ是後の話あり。
 編者自辨道。妙惠ハ眞の比丘尼あり。人力を尽して。

精舎を造りて。菴草の庵さし。志ハ雨露を凌ぐ。為の
 素門の志。耶も有ら。事小あん。釋名小草。以圓居と
 爲菴と曰。菴和名抄菴ハ菴あり。自廢菴ありと見。然を
 菴と稱する。僧徒の栖あり。つれを。世ハ本邦の諸湯殿
 二ハの掛行院。或ハ餅汁屋。割烹あり。庵号を稱する
 麩都會の地あり。隨多う。河漏麩ハ昔一僧ガ。焦初
 一あり。バ余も有べし。愚考あり。妻ハハヤガ。汁粉屋ハ備措て。
 割烹家ハ魚等の肉と。庖丁を。のちあり。けりて。現生
 ると適ハ。屠殺做を事あり。あう。何ガ。菴と稱するハ。
 相應う。む。若ふべし。亦。佛師の菴号ハ世を風流小
 遁をられし。芭蕉翁を眞似ふ。有ら。と眞の庵さしハ
 寔小抄。一。某庵とハ表の。裏を。現け。ハ。原。末。文。有。

歌も旅を待も紙を以て。唐山の學びハ更あり。けしき
 一邦の古事さく知くで。唐貞観の多たを歎。法
 格も無き毫を揮て。經冊扇面を及古ふ。一洞
 筆を會する事。高賈児ハ洗で逃あ。竊不其所行
 を見ふ。己ガ初會を的。不春衣を縫。芭蕉忌初會
 で屏を搦ん。と會算用ふも。風交一斤。雞淡包も
 一因録めて。池の會ふハ飽までも。酒を飲版と喰ひ
 聖日深池を慮たぬ。凡俗鄙劣憐むべし。亦只佛道
 のもあつむ。佛法も燒棄して。持戒の比丘ハ是不
 あり。利髮深衣ハ表のも。裏ふハ布施の多たを歎し。
 後門よりハ風呂衣包ハ痛燒の蕪重箱。今朝新道の
 妾宛より。歸一むりの後。香を本堂の如來に嗅

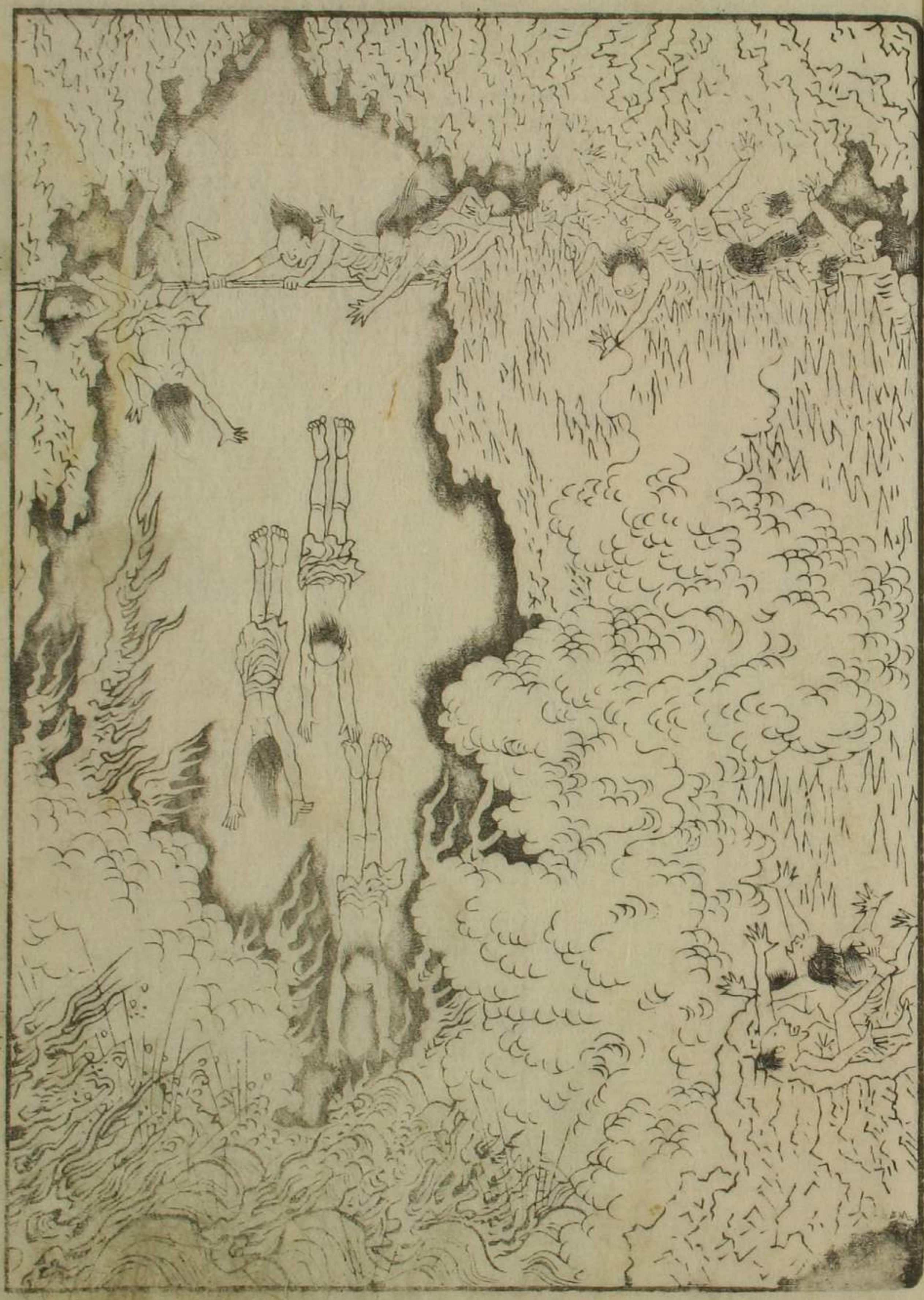
て。朝勤行も最可矣。是咸自由の只過く。大都會故
 あり。べく鄙寺ふ。自然持戒の僧も存んと思へ。衣被
 不事を懸まく。ハ最も瘦く公然と。女房氣どうの密
 妻あり。嗚呼笑ふべし。歎をべし。正法も邪道不隨。風
 流も俗劣了。導師斯の如くあま。信者も亦是不
 隨ひ。貪欲無慈ふ。一貪を恤ま。慈不邪行を故
 去。非義の蓄財を布施不攝。ち嫁をひび。一舌をりて。
 念佛題目と稱へ。つり。後世を願を愚痴ある。法を賣
 僧俗男女を顛倒妄想狂乱と。佛ハ号けぬひり。金
 剛經注頌不曰。正人説。邪法。邪法悉歸。正邪人説。正
 法。正法悉邪。江北成。枳江南。攜春來都放。一般花
 云。懼べし。慎むべし。只僧徒の真面目とハ。一葉門の

古歌小

羅漢の九尺小足より草の庵端より悔し雨垂りせば
余も羅漢の法門に皈さる者月日不數をひて十大弟子十六羅漢五百羅漢と高下を分かち其の衆徒數萬人あり四部の弟子をぞ教導しめん

因ふりの十大弟子の頭陀第一の摩訶迦葉尊者多聞第一の阿難尊者智惠第一の舍利弗尊者神通第一の目連尊者天眼第一の阿那律尊者舍利弗第一の須菩提尊者說法第一の富樓那尊者論議第一の迦旃延尊者持戒第一の優波離尊者忍辱第一の羅睺羅尊者あり一書に優波離尊者を敬みて可羅といつと加えしに從あり十六羅漢といふ第一の羅

羅漢尊者第二の迦葉尊者第三の須菩提尊者第四の蘇頌尊者第五の諾那尊者第六の跋陀羅尊者第七の迦哩尊者第八の弗羅尊者第九の博迦尊者第十の半提迦尊者第十一の羅怛羅尊者第十二の那伽摩那尊者第十三の因提陀尊者第十四の那婆斯尊者第十五の阿氏多尊者第十六の注荼半陀尊者是あり四部の弟子といひ比丘三の卷十八比丘尼前丁二優婆塞在家の女五戒を持つを但し男不は是あり五百羅漢の畧を然る不提婆の畧を酒を嗜む性あるは勤行を怠るも一日世尊提婆を徴て汝不見る處あり者不後ひ来よと宣ひ降雲不勝おへ提婆も自然雲不喜



世尊
泥犁を
觀せて提婆の
惡を
戒む

らるる虚空遙小昇一時世尊の子方を指揮ぬひ心不犯
那處を觀よと命せし提婆ハ惶々つゝ見了阿耨起る雲ハ
濃墨流一玄如くあり霹靂より凄冷と紀猛聲天地不
震動つ十六地獄現きより牛頭馬頭の羅刹債萬の罪人
を呵責の形勢悉く見えよと威ハ大如連の氷不閉ら色
威ハ大焦熱の焰不晚び焦炎車不棄らま刃劍山不登せ
らるる五躰を大く劈まると亦返落さきて攀拏する子
般の大呵責よ小罪人の苦痛叫喚刹那の間も止時無
有聲の提婆も戰慄猶も怖一の形勢うま那罪人の如何
ある者の威了果ふゆや示一ありと同奉まば釋尊ハ貞願
ぬひ是ハ威惡政を布て民を虐げ威ハ人を殺害一獲不
生聚を屠殺一人不殺き親を殺如ふ一兒を殺は兄弟と憐

まざり一者妻子不泣を見せり他の女を愛一威ハ辟陽侯と
引入て夫不耻辱と喚え一者威ハ酒を過して父母より受一
身躰を竟不傷り他の妻を密通て娼と一老者威ハ他を恤
まき高利を債て天下融通の金錢を積蓄つて施さる者
其它妄語竊盜一老者罪の輕重不從ひて十六地獄不墮
落せり那を見上猛火の穴不隔りて登るも恨つて苦一
む者ハ五戒を破り一罪の責ありと審不示一ありふぞ
提婆ハ亦怒怖あぐる奈何一と五戒を皆破りゆ者みゆと
同奉まば余まばとよ被行ひ邪バ他不誅きて妻も盡く
酒をくり深く嗜みて醉狂人と喚まつ常不飲酒戒を破
り一ガ一日舍壁の竊を盗み殺して食喫ぬ是殺生之竊盜
の二戒を一時不破り折一も隣家の女ハ斯とも知らむ

解也卷之五

終を尋ね来しと。理あく己室へ引のけ。強逼て是と交通之。
 邪瀉戒を破りし。従ふ。遠女海にがりて。官へ祈へし。忽
 地召捕まへ。訊問さる。小腹たたくも知らず。と粟へ。妄法
 戒を破り者之。如斯大罪を犯ま。如き其原ハ酒より。生
 き依て道を学ぶ者。酒一滴も。飲を禁む。借使在家
 の男女。酒を飲者。酒一滴も。飲を禁む。借使在家
 正念を失ひ。必を泥犁に墮落をへ。將死しぬ。後の事ある。と
 現小酒ハ人を殺し。正念を失え。後毒業之。醉て前後と知
 ざる時。息の呼吸わりと。雖も醉ハ死人。小異ら。走。亦。睡。さ。を
 を怒罵り。或ハ泣哀。て地を固らせ。原来放心し。在ハ。思
 たる。不。義。と。亦。損。失。し。て。醒。て。悔。ま。ど。も。人。宥。さ。ず。地。獄。中
 の。地。獄。大。病。中。の。大。病。ハ。酒。より。候。る。の。罪。ト。余。も。バ。辨。む。を

悪強し。人小酒を飲む者ハ。死し。冥府の呵責ハ。勿論。五百
 生の其間。鱗属。或ハ蛇。地獄の。四波。毒。死。者。不。生。る。べし。と。懇
 切。不。交。諭。し。ぬ。提。婆。の。飲。酒。を。戒。め。ぬ。ひ。つ。直。下。界。降。り
 ぬ。バ。提。婆。ハ。夢。の。覚。り。が。如。く。大。小。漸。愧。後。悔。し。て。身。の。罪
 を。勸。解。奉。り。是。より。勤。行。懈。怠。なく。竟。不。阿。羅。漢。果。と。得。ぬ。
 小。提。婆。の。新。宮。も。母。君。も。愈。世。尊。と。信。仰。し。て。白。版。解。版
 甘露服の。三。大。王。と。共。偈。ふ。佛。果。と。得。ぬ。ひ。ら。る。
三十三 佛の教化。月蓋。蓄財。と。教。を。弄。祇。園。精。舍。を。營。む
 雜。陀。王。而。位。の。後。も。君。臣。和。し。て。民。富。饒。不。天。下。暴。卒。あり。し。久
 世。尊。亦。衆。徒。を。從。く。帝。土。を。離。て。諸。國。を。經。歴。教化。し。ぬ。ひ。つ。
 性。々。毘。舍。離。國。あり。菴。羅。樹。園。大。林。精。舍。の。重。閣。講。堂。不
 入。ぬ。ひ。て。二。千。五。百。人。の。比。丘。と。俱。不。說。法。教導。し。ぬ。ひ。つ。を。日。毎。ふ

群集して聽聞せし者、各々信心肝不惱して、賢なる最早の
 諸根と凋伏し、諸の煩惱の六度不趣き、菩薩の修行六波羅、出家得道
 一ゆる輩、二萬餘人不速びりり、然るも遠邊なる月蓋長者と
 喚做を者なり、財富無量不積蓄して、家の造りハ王居不等しく、
 栴園最も廣大あり、不凋を以樂地を裏し、地ハハ鴉鴉の石と敷
 黄金の桶不摩尼宝珠と莊嚴、壁ハ淨玻璃、扉ハ金銀玉の簾
 綿の帳不種々の花幔を掛つ、珊瑚の枕、琉璃の牀、屋棟裏
 天井柱、勾欄都て遺あり、金銀珠玉を濡めざる、滲漏も無
 けし、光輝四下不散、徹して、觀る不射眼、き天堂宮觀、度
 面三時の景色を尽し、志、泉水、鑿山、諸木の名花ハ、微細不
 名状を、ぐらむ、彫り、富貴歡樂不、妻子、氏族も、常つ
 其躬ハ五十歳不、疾ぬ、も、膏愛執の、海不沈、く、死流轉の

苦界と知して、煙貪慾情慾不、毫も無常を觀せねば、三寶
 皈依の心ハ、無く、迦、不世尊在せども、猶んともせ、思、
 夫、池、不、好、意、不、也、亦、自、不、慈、を、執、今、少、と、佛、の、物、と、供
 養、て、も、佛、より、其、怨、と、較、を、と、更、不、無、は、色、ハ、佛、供、養、の、益
 あり、と、故、て、後、世、も、當、ま、ぬ、由、世、尊、傳、一、聞、し、已、て、愚、憚、む、じ
 教、く、べ、し、一、切、の、男、女、四、法、と、四、法、ハ、一、不、誑、二、不、誑、三、不、誑、四、不、誑、
 邪、行、不、し、て、善、提、心、あり、是、を、人、身、の、身、と、名、く、彼、富、貴、歡、樂
 不、し、て、其、身、国、王、不、等、し、く、と、も、躬、て、不、現、せ、う、く、畜、生、道、不、隨、
 一、志、不、異、あ、く、く、速、く、救、ひ、得、さ、ま、べ、ら、ま、と、大、慈、悲、心、を、獲、し
 あり、と、縁、無、衆、生、ハ、度、一、難、け、ま、べ、遠、方、より、赴、く、べ、し、と
 阿、羅、羅、羅、同、連、須、菩、提、優、波、離、密、們、を、召、喚、し、あ、ひ、忝、く、も
 釋、迦、牟尼、如、來、大、光、明、を、釋、し、く、月、蓋、長、者、が、蔭、前、不、停、立、

各金碎瓦碎をのりて飲食と乞ふつば有繫不離金の月蓋也。是
 を見て思ふ中。富位不昂て世不在まき。十善萬象の玉
 ありて。一天四海の君不在まき。所適世ませし。あど。俺
 素隱つらん。益も益とてあり。因惡報し。些可。供養
 奉らんと。茲不所善心の獲し。志も自然。佛果の結縁
 らん。最清淨ある。白米と。無湖の盆不盛上て。自捧
 世尊歡喜受ぬ。ひつ。善哉。長者終長くとも。昔
 夫南贖浮洲不生子。人ハ壽百歳。のりめまど。多
 一期。七十古来最稀ある。生涯の短き。一樹
 の榮夢。幻より。因果ある。二寸息絶て。現世の惡業。忽地泥
 梨不墮落して。幾千の呵責と受つ。視魄竟不青
 亦世不。人胎不。罪障の深き故。身會

て難病と患ひ。飢渴を通りて。最愛の子と。離別不及
 或ハ罪と犯して。牢内不繫。界平の代。生ま。白
 下。其身と亡ひ。首と解と分。亦生。運
 水中。貝類と生。或ハ海流。怪の敷。土中。如
 首尾全う。ね身と。教て人。解ハ。更
 魚鱗。不。能。二世の異。生。是。其。最。初。所
 善行の益。報ひの。長者。今。代。を。重。ね。富。貴。の。家。不
 来て。歡樂。不。耽。了。如。き。ハ。世。不。親。を。孝。養。し。妻。子。を。憐
 他を恤。作善の報。不。依。今。有。と。今。悭。貪。無。慈。心
 て。他を恤。正法と信。せ。只。顧。守。積。奴。を。做。さん。心。不。念
 とも。無常の風。不。誘。引。空。く。巨。萬。の。財。宝。也。遠。世。捨。置
 の。作善。切。德。益。故。不。方。僅。説。畜。け。道。不。墮。落

して苦くあらん。斯くての長者が前世も修行も画麻あり。若今悪心を改轉して善道も修するべし。二世の功德廣大あり。来世の極樂天堂へ必也入り生るべし。貴族貧富推さくして老病死苦と脱すべし。三界の安楽と無し。樂しみと思ふ苦く。善いと思ふの憂し。善悪三世の輪回を離れて天上の果を得ん。あは六塵の樂慾を最厭ひ離べし。慾の大ひかりて止め難き。別て色慾貪慾あり。諸の煩惱除く。貪慾最勝をこそ其業縁轉深きを憂も悟るで後の世を當たらざるの愚あはくもや。余まは秘密を惜みて教さば。貪慾ども脱し。無き長者の何歳までも在世心を借使百壽を保つとも。現世の恨の他家あるべし。長者はよく善美を尽せし。金殿樓閣も身を置いて。暴水猛風震雷の逃りし防ぎもよむ。はまど。無常の風は避れくも。命終るも除く。

ての妻子珍寶宮殿庫倉器財王位と雖も隨て身一個善悪の修行も隨ひ極樂の地獄へ外くの。備死後も至りてら其身貪慾無慾より。徳俸ありて子へ遺せども教訓し。うらむさへ多し。是不肖の子ありて。父母の死せしとまひふ。慾意も財産を捷ひ。身と放蕩も持壞して。竟しは室庫田園と賣。父母が多事。事苦の蓄財一時も尽て。年忌は養も。做難く。至らぬ。如きは。是夫無善の悪報也。適家府と亡はさる。は徳。子無く。亦々女の子をとりありて。他の男子と養ひつ。若も食むして蓄へし。ふ做を財貨の只徒し。孰も他人の有とある。長者知らむ。子孫も官福と遺さる。清貧却も安し。小如きとらり。子孫も官福と遺さる。清貧却も安し。とを長者速く無明の醉と賞し。善提も上るべし。と聲ふ。

法の尊たてとと發明して漸愧小徳を世尊師を礼拝しん
無慈悲の罪を懺悔して佛法信者と成りしより大林精舎小已ら
園園を多く寄附し奉り、鰥寡孤獨を憐れりて、廣く恤む施し
らまば世の人其徳を仰たり。今も役小亦舎備国小須連長者と
嚙做を者わり。月蓋の縁家小して富貴も勝劣なき程あり。凡
月八蓋二室小飯依せし由と傳へ聞て俺も亦如來と清く奉らん
億小りの間遠土地小精舎一字も盡くりし。當国の貴子祇陀
の莊園度さ八十頃之地所一面小黄金數億萬兩を布備し并に
遠地を購ひ求む其志と感嘆して祇陀貴子も件の國なる樹木
玉石と寄附しめ。月蓋遠義を聞りりも須連の志ふかと令し亦巨
萬の財を散りて土木の工造と大に集合精舎造營志なり。方四十里

の旧幸の里教ありて、境小七室莊嚴の大伽藍成就しぬ。今も巴園地の
六里廿四丁、施すハ須連樹木の施すハ祇陀堂塔の施すハ月蓋おまハ二個大檀
那あり成然し。精舎小ハ有るまども、舊の地小ハ有るまども。祇園
精舎と号しり。世小天竺の五山といふハ、廻遠禮園精舎小竹林大
林、檀多林、那蘭陀の五箇寺あり
因小ハ檀那とハ梵語の施界之西、憾小ハ施すの工と障、那律
庭と稱せりと。唐小ハ觀、練しと檀の音を假て陀小執り、律庭
を累して檀那といふ由、載て書言故事小あり。今もまハ檀那云
推あべて物と施すの稱あまハ、今、白雲國の僧施るとして檀
那といひ檀家と稱し。檀家も亦憑その僧を檀那寺と是
を稱すも、其用意盡くあらず。法界次第小施小二種あり。
一ハ財施、二ハ法施とあり。と見えハ俗ハ僧小財を施す。

故小僧より檀那といひ僧ハ俗ノ法と競施を故小俗より
亦檀那といひあり

茲ハ六名の道師あり各ハ術を得て神通を弄ひ舍衛國王ハ重ん
ぜしき一ガ精舍造営と見て大ひ不歎き釋迦當國ハ未だ未だ
俺道衰滅と一と思ひ佛法ハ人種を對亡國の基あり精舍造
營停止しあつと國王ハ歎つりきども當時國王も釋尊の徳と慕ひ
あふふぞ敢て終と容ぬねば我慢の道師們氣と焦燥余ら六僧徒
們と術と揃て道家と佛法の勝負を賢かぬと自望も國王の
國ハ於て舍利弗と術と揃ふ一個も勝と能ハざる有弊我慢の六
道師も舍利弗の神通不伏し俱ハ佛弟子と成り國王ハ父子群臣
們も愈佛法を尊とて馳て世尊と禮園精舍へ迎入奉りぬ

三十四 釋迦牟尼佛涅槃不入火并佛舍利被養

却て世尊ハ禮園精舍ハ在て競法ハあふと七年ハ及びり
國中ハいふも更あり遠近の國人を大ひ不化化濟度ハあひ今ハ五天
竺ハ佛法の行ハまざる國もあは湖上安靜あり釋ハ世尊ハ既ハ
富算七十七歳ハ成らせぬハ化期の迫たを知覺ゆ高弟と從
あひて靈鷲山ハ編きあひ梵天王より教り一金波羅華と拈ト
あひつ十大弟子十六羅漢其宅三千餘人の大衆と聚て今日の後法ハ
切徳附屬の大車ありて則遠華ハ三見ありと宣示し一も諸
羅漢未だ悟得て座禪工夫して點流つるハ摩訶迦葉の微笑ハ
虚空を觀とて在けるあぞ釋尊歡喜ハあひて吾ハ正法眼藏涅槃
妙心あり摩訶訶行の切徳迦葉ハ附屬と宣ひつ伴の華と令釋の僧衣と
街もづら大迦葉ハ遮与ハあひ亦阿難を徵あひて汝も俱ハ
副て傳化せよと命トあひつ波金鉢と授あひ兩個ハ渴と授て曰く



釋迦
如來
涅槃
の
尊像

涅槃者梵
語成佛之
義漢譯言
寂滅是謂
滅盡一切
煩惱也

法本法無法無法亦法今付無法時法々何曾法と偈已まら西
六弟子の恭敬礼拝一佛勅を奉りて退たらしめ今を迦葉を
滅後の如來と尊稱せしむ所以ある哉。延て世尊の靈筭山一
半在せし身て亦遠地大迦葉と措ちて拘尸那城小報きぬひ
迦羅雙樹の間にて遺教經を説ぬひ一其翌年の二月上旬霜露の
清極より法瓶小卧ぬひはるば阿羅漢大ひ小終りて受ひて醫
奉らんと終きしと世尊制し止めぬひ。吾滅度の時至りぬ。故て醫
及ぶべしや。吾入滅の後ハ迦葉と師と。猶金瓶流道を修ま
遺言一ぬふと承りて四部の大衆泣悲し今一刻を經ぬひて不
們を教導しぬひ。真正等覺を得さぬぬと嘆き願奉るも世尊
おんを揮ぬひ。天壽原素定數あり。何の方便も是と延さん。人界の
常ハ耶の如し。今ぬぬも吾ハ亦信等諸根の利鈍を觀て其

まを所不隨ひ。或ハ大明神と示現し。或ハ聖人と顯現。或ハ佛身とも
出現せん。然の邊に立ちてと云ふと論ぬひし。其後の教一言も
開結あるに。既其月十五日。清頭と北に向て西小面ひ右脇小卧。眠ぬ
とく。泊然と大涅槃に入ぬ。密算七十九歳之時。小中華してハ周の
穆王五十二年二月十五日。日空ハ地神五代。鷲嶺草葺不合尊の所
治せぬ。當下如來の法體より。金光明を發ちぬひて。大千
世界不輝きり。諸所不分明。阿羅漢を下め。百国の王諸仙諸
道師。恒沙の水。夜奔獸。夜禽。濕虫。小至るまで。是や如來入滅し
ぬ。應あらしめ哀泣し。涅槃の相好を釋まぬぬ。威憲く妙
羅雙林。所狹ま。集會して。億萬の衆徒と俱ふ。首と偈を聲を
放ちて。涅槃しむ。理ある。諸の相も。諸佛菩薩。梵天帝釋。四天
蓋教の天部諸善神。西方淨土の無量壽如來も。紫雲小垂して。末

降しぬ。極樂界へ引接しぬ。佛相定し尊くも世尊の神靈を
 守護しぬ。諸神諸菩薩亦若。翠天不界ぬひける。釋の奇將不
 孰り亦感涙と流さるべた。大衆齊一合掌して。恭敬礼拝するは。
 遠く諸羅漢の返々も。如來の尊嚴を守護しまつて。跋提河の邊り
 あり。天冠穿し入奉り。淨香湯りて浴灌しまつて。大迦葉のまると
 後けり。世も二月望の佛滅日と。十二月と。ついで流わり。并に佛生日の
 辨し述し。周の建支不據のの。古典と熟も涉獵ぬあつて。涅槃經
 小曰。如來何故二月涅槃善男子。二月名春春陽之月。万物生長種
 植根栽花果敷榮。江河盈滿百獸孚乳。是時衆多生常想為破
 衆生如是常心說一切法悉は無常。云遠經久不依。二月ハ今の
 二月也。其代不當。一。周の二月。丑の月。ハ非也。丑の月。今の
 万物生長。花果敷榮する時。あつらんや。今の佛滅日の。誤るべし。

を知るべし。西上人の奇小

預りの花の下りて我死あん其二月の正月の頃

是涅槃の時と慕つたり。同語休題。當時大迦葉の靈筵の靈筵の香園
 窟に在けるが。光明輝くと見く大く。涙き如來涅槃しぬ。ひぬと嗟
 嘆しつ。徒弟と從つ。婆羅雙林不遠り。一。世尊の既不化しぬ。一。六
 迦葉の源く。働り。一。が。鄭ての果とと氣と。屈す。四部の弟子們を
 慈めつ。安葬の儀と取當め。貴族老若の男女共。偕慈歎の涙を。下
 不。法棺と送り奉る者。後憶人との。教を。鄭て佛葬の金
 棺の。香薪を積累して。淨火と以茶毘し奉る。巴。陀。佛舍利
 數萬顆。金剛石の如く現る。一。大家歡喜踊躍して。百国の王分ち
 戴き。各本国へ持還りし。一。密塔と造り安置し。一。都如來正法
 を以。世と持しぬ。一。四十九年。普く有情と化す。一。其數勝て

香園 堀鏡
 驚ノ誌語
 爰ニ山中ノ
 別名ニ記シ
 ハ編者ノ私
 ナリ

算ふべりくは。切徳実小廣大なる。源遠くして末益分り。三國小傳りて。今ハ八字九字より。十五字小派と云るも。如來一世小親由ひ。華嚴阿含。方等。般若。法華。涅槃の六題。經中と別て。教を傳せざるの。余も復小雜陀王も。太子小富位と讓り。由ひ。出家。適世。由ひ。つ。彼。龍沙王。優。慎。王。舍。衛。國。王。其。貴。子。祇。陀。阿。闍。世。龍。種。と。南。と。月。蓋。復。建伽。陵。の。長。者。彫。工。毘。首。羯。摩。の。他。有。縁。の。一。切。衆。生。と。勤。行。功。徳。の。十。大。弟。子。十。六。羅。漢。共。侶。小。彼。生。の。素。懐。を。遂。へ。八。咸。佛。法。の。教。化。小。依。是。り。今。是。ハ。後。世。今。日。ま。で。も。四。大。苦。と。脱。く。極。樂。界。へ。是。る。者。幾。億。萬。人。と。り。小。限。も。無。ハ。是。や。世。尊。の。引。攝。一。人。大。慈。悲。小。有。る。上。ハ。王。候。より。下。庶。人。小。至。る。ま。で。最。も。信。ト。尊。む。べ。い。

三十五 日本精流宗門の傳統并 佛法方便の妙
佛法 皇國小傳りり。八人會二十代。 欽明天皇十三年十月百濟國の

聖明王より。金洞の新巡佛像と。經論若干卷を教りて。遠法諸法中。小最殊勝之。金量無邊の。福徳果報を生じ。祈願情小依て。協つむと。り。小。と。無。く。是。より。佛。法。皇。國。小。入。て。蘇。我。大。臣。大。小。信。ト。聖。徳。太子。飯。依。一。由。ひ。て。愈。其。教。法。を。江。湖。上。小。弘。め。あ。小。柳。八。宗。と。稱。する。一。小。三。論。二。小。法。相。三。小。俱。舍。四。小。法。實。五。小。律。六。小。華。嚴。七。小。天。台。八。小。真。言。是。之。禪。を。加。え。て。九。宗。と。し。曹。洞。淨。土。を。入。て。十。一。宗。と。し。咸。天。竺。中。華。少。て。發。起。せ。り。蓋。源。遠。く。新。遊。如。來。より。由。ぬ。も。無。く。三。論。宗。ハ。本。邦。小。宗。旨。と。云。る。始。也。天。竺。の。青。蓮。菩薩。を。祖。と。す。 日本小。 推古天皇三十二年春三月。百濟國より。惠灌。と。り。僧。流。來。て。是。を。弘。む。河。州。井。上。寺。の。開。山。之。法。相。宗。ハ。天。竺。の。護。法。菩。薩。と。祖。と。す。唐。の。玄。奘。三。藏。天。竺。より。傳。へ。て。中。華。小。弘。め。と。日本より。大。慈。冠。彌。足。公。の。子。定。惠。和。尚。波。國。一。波。て。 日。攝。一。傳。え。り。より。

玄昉僧正是を弘む便合宗も亦玄昉是と傳え滋実宗ハ道慈律師
 本邦不傳一しうとも遠二宗ハ諸宗の學不備え一のそ別不宗門を
 了了無し律宗ハ天竺の菊多之藏を祖とす日本ハ慈深天竺の
 濟寧天牟勝室六年唐の睿真和尚來朝して是と弘む南都振提寺
 の開山之華嚴宗ハ中華の華嚴和尚と祖とす日本ハ良辨僧正是
 を傳えて東大寺不興隆せり天台宗ハ唐の陳の南岳大師と祖とす
 日本ハ桓武天皇の濟寧延曆二十三年不迫江の最澄入唐して
 道邃和尚より授け豐年六月不迫江にて
 比叡山あり是と弘む傳教大師是之真言宗ハ天竺の龍猛菩薩と
 祖とす日本ハ續州の空海最澄と俱不入唐して慧果阿闍梨
 より授傳え平城天皇の大元元年八月不迫江にて是と弘む弘
 法大師是之且遠宗不新古の二義あり古義ハ弘法大師の流新義ハ

根柢の興教大師の流あり禪宗ハ天竺の達磨大師と祖とす
 日本ハ後多羽院の濟寧文治三年四月備中の榮西入宋して英
 龍の流と授傳え建久二年の四月返朝して是と弘む孫念建仁寺
 の開山平光國師是之曹洞宗ハ日本より道元和尚入宋して如淨
 禪師より授傳え後朝の後山嶽あり深草あり是を弘む越前永平
 寺の開山之淨土宗ハ天竺の四勝馬鳴大師の流と傳て日本其他の
 法然上人後多羽院の濟寧不是と弘む上人ハ最初天台と學ひ一ハ
 後黒谷不在々専念佛の淨土門と開たりより流派教多不流布と
 と雖も統中盛人あつハ鎮西西山の二流之聖光上人の流と鎮西流
 義といひ流空上人の流を西山流義といハ遠西僧俱不法然上人の
 弟子之以上十一宗ハ西域中華より傳ふる所備亦一向宗ハ真宗ハ法
 統上人の弟子善信坊建曆年中より是と弘む親鸞上人是るハ遠

奉る人 大織冠十八世の裔 宰相有国の六世 日持有能の實子 小一七
 伯又六條三位能綱の養子とあり 童名勢満九と喚ぶ 九歳
 子して出家す 慈鎮和尚の養子とあり 天台宗ありける 後法法
 の門子入 竟子真宗の用流たり 弘長二年十一月廿八日寂して年九十
 一歳 子孫連綿と相續して 十一代顯如上人の時 淨而位科と然
 了しより 後指原院唐感す 其賞として 奉預寺 初て門跡の
 号と許さる

周小の門跡号へ 宇多法皇の在りませし 淨室の仁和寺と後の
 世に 淨門跡と稱するより 起る 法皇の在せし 所を 淨門の
 跡といふ義あり 天子のおん 命を 門跡と云當らむ 於淨門跡と稱べく也
 法華宗の文應年中 日蓮上人是と弘む 高祖の貫名方 淨門重忠と喚
 ばる 實子の 貞應元年二月十六日 安房の小港に 遷す 嘉祥小一

出家せし 法華經を 勸めて 諸人と 教化し 其黨頗る 多くし
 竟小一字と 用興せり 弘安五年十月十三日 寂して 年六十一歳 時
 淨室の 一遍上人 熊野權現の 靈夢を 感得して 建治年中より 諸
 國を 遊行して 是と 弘む 故に 遊行上人と 稱す 河野七郎 通弘 二男
 あり 大念佛宗の 宗徳院の 淨室 大治二年 大承の 良忍上人 弘めり
 其後 淨室絶えり 後醍醐天皇の 浄時 小深に 法明再興せり 其
 風一向宗に 似て 異る 妻を 帶て 肉を 食さば 眞盛派の 故奉の 眞盛
 是と 弘めり 眞名あり 以上四字あり 日本あり 建治の 宗門之 通計
 十五宗 門流と 分ちて 各其派と 異ふ 是を 通ども 類く 旨一切 衆生を
 善懲惡の 教戒中 慈皆 後世を 吊の 慈 然る 迫世 後圓の 文旨 善
 智の 匹夫 匹婦 們 地獄の 佛の 方便 ありて 死して 後小 耶の 如き 呵責 あり
 づ 死理の 善し 生悞の 不信 心より 不正 行ひも 隨多かり 亦地獄 極樂の

天小もわらむ地小も有ま現世の中不感是あり。同く人間不けまても貴
 族貧富幸不幸善惡邪正不隨ひて各得ぬる地獄もあり。亦極樂も有
 幸とぞ。是ハ捨る説ありねど泥弊毒と云ハ然るま地獄と見えず
 者和漢不多り其一二を言ハ後周の文帝崩逝し由ハ地獄不隨ち
 ぬひしと趙文胃死し之と見つ蘇生て告るると眞教記に古書不載
 也。 皇國の醍醐天皇崩逝の後日荒上人頓死せしめて。帝之臣
 共俗小地獄不責らまぬひしと正し見奉りて蘇れ由を奏聞し其
 苦患を救ひ奉り幸端抄不出る。帝王とて不善をまハ如斯呵責
 をせしまぬ次て民間穢の男女們御善行功德なき者死しての後不
 呵責と受り地獄垂たと有るま且二世の後佛の方便渡ける理ハ
 奪しといふも亦然るべくも死して渡ける者無量と李白死して郭祥
 正とけし事大明一統志不見えり。永禪師死して房館とけし由

東坡待序不載。戒禪師死して東坡と生ま由冷齋夜話不
 載也。亦法華經を讀み女死して山谷とけしと春清孫不記
 たり。宋の葉夢得が孫活不白樂天ハ仙宮よりけし来由と載也。
 如斯例夥るねハ收挙る不遑ありむ世の人渡けむしてハ惡人浮
 雲の富と深ち善人薄命不て貧小苦し。因果應報も空し
 うらん都奇あり哉妙あり哉百世の今日まで彫のぞく不可思議
 の正教を遺しぬひし稱尊が在世七十九年の長壽を數指不過ぬ
 一小書不説盡まべくも有ねハ只百分の一と記して佛法皈依の婦如
 の為小其功德最尊の崖界とも知しせま然しさ小條の如く編次
 ぬ。今世ハ漏る事も夥るて今ハ婦女子も尊知るめ。難波多々
 因位流離王の暴惡雷死の夜とも宵なり。流離王が因果應報の
 輝ハ只是懲惡の方便也。思ふ小流離ハ虛名のみ其人ハ有下と云ま

彼り物落ふや有んばうん其故と考ふる小流瀬ハ象の一名ありて遠
 多正孝凶悪之大ひある則ハ其母と會ふ故小象と不久呂不と号
 母胎喰ふの畧之とぞ浩了凶名の名と願して。残害の流と述ハハ
 於自性といふある故古典小遠格最多り。擧小致ひて本編亦
 遠格の杜撰あり。將愚考と云(贅)一者ハ罪得がました野をさぐり
 也善と勉まは。是あ人所謂方便をさへ佛も念ふたぬ故。着官編
 着の拙きと云て只佛徳を仰奉り聊も聞提ある宜しく菩提心と
 護へぬ。

八宗紀原新迦實錄卷之五 大尾



天一方
登龍丸

食物一切
 合さし

登龍丸ハ天下一方我我秘法して疾瘵爲飲一季の妙薬之證ハ十年廿年
 疾瘵多く心と胸痛立居欲う又前飲之れを子に胸痛疾瘵し毒事
 治し疾と歩前飲之れを子に病全くゆるる疑は是に用て心氣の疾れと補ハ血
 疾瘵しと歩前飲之れを子に病全くゆるる疑は是に用て心氣の疾れと補ハ血
 十餘廿年高息 一 勞瘵の瘵 一 肺の瘵
 一 周候せりつぎ 一 瘵飲之れも出れ 一 動氣つぎ心冲
 一 小兒百日咳 一 婦人産後瘵の瘵 一 齒飲之れも心痛
 一 齒飲之れも心痛 一 齒飲之れも心痛 一 齒飲之れも心痛
 一 齒飲之れも心痛 一 齒飲之れも心痛 一 齒飲之れも心痛

